

琉球大学学術リポジトリ

芥川龍之介「続西方の人」注釈

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2007-07-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小澤, 保博 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/983

芥川龍之介「続西方の人」注釈

小澤保博

A commentary on R. Akutagawa's The Man in the West. II

Yasuhiro OZAWA*
(Received July 31, 1987)

* Department of Japanese Language, college of Education, University of the Ryukyus.

1 再びこの人を見よ

もし万人がキリストに倣うという結果になったら、それは宗教の世界を逸脱した独裁色の強い政治の世界になる。キリスト教がローマ帝国の国教となり、地上の強大な権力と結びついたのも正統的解釈に因れば「万人のキリストに倣」った結果ではなく、「一人のキリストの中に万人の彼等自身を発見」した結果でなくてはならない。

自分は今、四福音書に拠って余りに恣意的、私自身に引付け過ぎたキリスト像を「西方の人」の内部に把握した訳だが、雑誌「改造」の締切りのため十二分に書き尽くせぬまま原稿が編集者の手に渡ったので、四福音書の内部からなおも私自身の精神の基底にひびいてくるキリストの声をさらに遺稿「続西方の人」として後世に残したいと思う。

時代遅れの、反時代的とも言えるキリスト伝、しかも信徒としての立場を持つことのない私のキリスト伝が多くの読者に持てはやされることは無いと思うが、しかし私は死に臨んで私の精神を執えるキリストの声をなお遺稿として残したいと思う。

2 彼の伝記作者

四人の伝記作者の中で誰よりもキリストから時代的に離れた人であったヨハネは、人々の記憶から具体的なキリスト像が薄らいだ事もあって、極めて自分に近いキリストを作り上げた。このキリスト伝は、マタイ、マルコの素朴なキリスト伝に比べても、またつつがなくキリストの一生語り尽くしたルカに比べても、一層繊細、巧緻な近代人キリストを見せてくれている。ヨハネのキリスト伝は装飾に満ちていて、読者はキリストの実体を見ることができず、ある種の不満を感じないではいられない。しかし、これとてキリストの一生の要点は漏らすことなく記述している。何と云ってもマタイ、マルコ、ルカのキリスト伝には簡素、素朴な美し

さがある。十字架に懸けられ、実人生を十分に生きられなかったキリストは、彼が夢想した天国という虚構の世界を強調しないかぎり、到底栄光のイメージと結び付かない。

ヨハネの描いた近代人キリストはマタイ、マルコのキリストの様な前時代的天才性を持っていないが、威厳と優しさの内に現代に生きる我々の精神に近い要素を見せている。

現実のキリストの姿を具体的に誰よりもよく知っていたマルコは必要最少限度の素材を使うことでキリストの実体を描き尽くした。そこでは我々はキリストの体臭を感じることが出来るのである。こう書いたからといってヨハネの威厳の中に緻細さを持ったキリスト伝を退けるといってではない。これらのキリスト伝はそれぞれ長所を持っている故に捨て難いがキリストを退廃的、虚無的人物として把握したあるロシア人はキリストを理解せず、キリストの栄光に水をさすだけである。

確かにキリストは、世間から嫌われていた売春婦、税吏、癩病人と交友関係を持ったが、すべて彼自身の理念に添った行動であり虚無や退廃から遠い行為なのである。

世間の弱者ほど天国に近いとするキリストの精神を具象化するため、キリストを子供として描写した画家達は、世間知の幼なさにおいてこういう彼を気の毒に思っていたろう。こうした彼キリストの姿は、生れてすぐ自己の使命を認識した釈迦より頼り無いものであった。彼の実社会に對する接しかたを幼児のそれと把握した画家達の方が、キリストの精神に虚無の匂いを感じたあるロシア人より多少とも勝れている。日常生活の喜びに浸っている時も、彼の挙動は何らかの形で天国という虚構の世界をかいま見せてくれている。天国という虚構の思想を実践的思惟にまで高めるため、十字架上の死が必要であることを彼は認識していた。四人の伝記作者はこの事実を書落としていない。

3 共産主義者

キリストの精神には、あらゆる浪漫主義者がそうであるように共産主義者の要素がある。マルクス主義の信奉者が読めば新約聖書は共産党宣言とその内容において異ならないであろう。キリストの先導者であるパプテスマのヨハネも富の公平な分配を要求した。かといってキリストは無政府主義者ではない。我々はキリストの人生に向合うことで、そのときの自己の精神が何であるか容易に認識することが出来るのである。

人間精神の奥底を究めた彼も大衆を扇動することは出来なかつた、あるいはまた誰かの指示を受けて動く事もなかつた。これらは全て彼の内部の浪漫的精神の故である。

新約聖書の内部の共産主義的要素を把握することが出来れば、キリスト者の視野も広がるであろうが、神話と歴史の間に明瞭な線を引けない日本ではそれは困難が伴う。

4 無抵抗主義

キリストは仲間と語りあって抵抗の姿勢を示すほど周囲に信を置かなかつた。それは自己の精神内部の浪漫的精神の過激さ故に、最初から周囲の人間との連帯を諦めてしまっていたからである。こうした処生の才は近代にあってはトルストイにおいて見られる訳だが、しかしトルストイの身辺に漂う虚無的な色彩はキリストにはない。新約聖書にあるのは人間的な愛の感覚である。

5 生活者

仏陀は12月8日、菩提樹の下で悟りを開いて仏に成るまで雪山での数年の修行が必要であつたが、キリストは洗礼を受けて40日後には救世主としての自覚のもとに伝導の旅に出た。それ以後の彼の一生は燃尽きる

一本の蠟燭に例える事が出来る。つまり天国という虚構の世界があまりに過激な考えであるため彼には肉体と精神の老成が許されなかつたのである。過激思想を保持し続けるためには若さが必要であつたということである。

6 ジャアナリズム至上主義

キリストは天国という自分が構築した虚構の世界を守ることに固着した。もし彼がこの過激思想から離れる事が出来たら彼の精神主義は破綻しても、実人生は平和裡に彼に穏やかな老年をもたらしたのである。そして古代ギリシャの哲学者のように微笑の内に全てを諦めていたことであろう。しかし、現実のキリストは若々しい肉体を十字架に懸けねばならなかつた。それが宿命の死、神の栄光を示す行為と称えられても、一人の男としては人生における最大の悲劇であつたろう。だが、この若い肉体の死によって人々の記憶に残されたキリストのイメージは永遠に若々しく、キリスト教という過激思想を推進した若者の残像を損なわなくてはすんだのである。

7 クリストの財布

瞬間を生きる事で夢中で物欲に対して枯淡であつたキリストは、おそらくお布施によって生活していたのであろう。財産というものを持たなかつた彼は極端な精神主義の考えに立って天国の門を指示した。彼は平気で明日の衣食住の心配をするなどといったが、これなど彼の生活実感を反映した言葉なのである。こうした私有財産に対する否定的態度のなかに共産主義者との考えの一致を容易に見出だすことが出来よう。キリスト教の理想を高く掲げて、確かに彼は明日の衣食住について心を配ることは無かつた。旧約のヨブ記には福音書の世界にはない雄大さがある。

が、福音書にはヨブ記の持たない人々を引付ける愛の感性がある。この愛の感覚に因って生前のキリストは多くの人々を引付け生活に困る事はなかったし、死後も多くの人々を引付けそのお布施の額は莫大である。

8 或時のマリア

キリストが最初に神の子としての自覚を持ち、自己の内部の精神主義に目覚めてそれを行為をもって示したのはルカ伝によれば扱れば12歳の時の事である。親子3人で故郷からイエリサレムに出て来た時、迷子になったイエスを3日の後殿に見つけた時の有名な挿話である。

殿の中で教師と教義について論議をしていたイエスは、学生時代のスウィフトと同じように早熟の天才としての才能を示したのに過ぎない。両親の少年キリストへの呼掛けは既に自己の使命を自覚した神の子としての彼によって峻別され、親子の間に厳しい乖離が見られる。自分の少年時代の体験と重なるかもしれない挿話を芥川はさり気なく記している。生涯の終わりに於いて芥川の心を引くのは、夫ヨセフの子供ではない私生児を生んだ母マリアの胸中である。成人したキリストが夫ヨセフではない、実の父の特徴を遺憾なく示した時、呆然とするマリアの姿をとらえたルカ伝の一節「その母これらの凡の事を心に蔵めぬ」という一文に芥川はアクセントを置かずにはいられない。生母芥川フクの人生にだぶらせてこの時のマリアの気持ちを作者は付度しているのである。

夫のヨセフではない姦通の相手の面影と才知とを息子のイエスに見出だしたマリアは夫の前に自己の非を恥なくてはならなかったであろう。それから娘時代の忘れてしまっていた過去の体験を追憶しなければならぬ辛い思いもしたことであろう。あるいは夜半彼女を驚かした、嵐のような一夜の記憶が蘇ったかも知れない。実人生を作品内部に埋没させたいという芸術至上主義の考えが少年イエスの心を捕えていた。平凡な

妻であったマリアはイエスが私生児であるという認識を持った瞬間、理不尽な人生に向い合うことになった。

9 キリストの確信

キリストは自己の掲げた精神主義、天国という虚構の大義がたんなる夢想に止まることなく人間の生活全般を支配することを、実現可能なテーズとなることを信じていた。彼の布教活動が成功したのは、自己の虚構を信じた確信の強さによる。彼の信念は揺らぐ事もあったが、大旨神の子としての使命観に燃えて布教活動に従事した。全てを犠牲にして神の道を歩むがよいというキリストの言葉は、彼の心を正直に語ったものである。彼は自分が示した神の道を自分自身歩めないことを知りながら、精神主義貫徹のため戦い続けた。

彼が抱いた思想は後年全て事実と成ったわけだが、それは不安と恐怖に襲われながら自己の抱いた革命思想を退ける事が出来ず、反逆罪で殺されたキリストの虚栄心による。キリストは全ての浪漫主義者がそうであるように、実生活を犠牲にして未来を夢みた大馬鹿者であった。ところでキリスト教の世界を蹂躪するツアラトゥストラをニーチェは超人と呼んだが、ツアラトゥストラに踏付けられる弱者の権利を最初に主張したキリストは、超人に対峙するという意味で超阿呆と呼ばれて言いのではないか。

10 ヨハネの言葉

人間の罪を背負って神から遣わされたイエスを見てみるがいい、私にとつて後進である彼こそが真の予言者なのだ。こう言ってイエスを周囲の人々に紹介したバプテスマのヨハネの寛大さは、自分の机の前に後輩のストリントベリーの肖像を掲げて、彼の文才は私のそれより勝ってい

る。と、つぶやいたイブセンの精神に近いであろう。これ等天才同士の相互理解の精神の高さには凡人同士の刺を隠した賞賛にはない、真の美しさが感じられる。先駆者ヨハネにそう言わせることの出来たキリストの天才であることは言うまでもないが、ヨハネもまた後進に道を譲る心の広さを持った故に、精神の度量の大きいという事で天才的であった。こうした事は鋭い才知ではない、ヨルダン川の葦が星降る夜風に吹かれる如く、和かな知恵を感じさせる世界なのである。

11 或時のキリスト

キリストは十字架の死を迎える直前、弟子達に死後の自己の思想を託すために、またそのために自己の肉体の感触を彼等に残すために、弟子の足を洗うという行為をした。自己の精神世界をソロモンの王国より偉大である、と認識していたイエスが示した謙遜の態度は我々の感動をよばずにはおかない。それは精神の高みに達しても時には身を低くして周囲と妥協せよとの教訓を与える為ではない。自ら精神と肉体の限界を感じた為に自然にそうした行為を示したのである。これはバプテスマのヨハネが「神の仔羊を観よ」といって周囲の人々にイエスを推賞したより、より一層威厳に満ちた行為であった。

精神の安定と平和を求めるものは、キリストではなく母の MARIA にその模範を求めなくてはならない。MARIA が示したのは忍従の美しさである。カトリック教会では過激なキリストの精神主義を理解させるための前段階として MARIA を仲立ちとしている。一気にキリストの精神の高みに達しようとするのは、難解であるばかりでなく、危険である。MARIA は天才キリストを生んだという以外取柄のない女であるが、自己の限界を認識して弟子達の足を洗ったキリストは、平凡な人生を生きてきた母の前に跪き許しを請いたいと思っただであろう。しかし、弟子達はキリス

トの弱気の姿が理解出来なかった。「お前たちはもう綺麗になった。」

この謙遜の言葉は、自分の死後弟子達の精神を強固に束縛することになる、自己の精神主義の勝利の予感を感じさせる言葉でもある。彼はこの瞬間実人生を犠牲にして、自己の課題を弟子達に預け人生に敗北しながら思想の勝利を確信した事で、弟子達より数百倍勝っていたのである。

12 最大の矛盾

キリストの人生の最大の矛盾は、彼が人間の持つ弱さを熟知し、予感し、それを許容する精神の寛大さを持っていたにも拘らず、自己の肉体の弱さが自らの思想を裏切る事がありうることを予想出来なかったことである。彼は最愛の弟子ペテロの三度の裏切りを予想し、人間の弱さに対する慈愛を示し、弱者の祈りの言葉に和した。こうした矛盾に満ちたキリストの言動を合理的に解釈するため、旧約の予言者の言葉が引合いに出されて説明がなされたが、この説明に無理が生じると今度は近代合理主義の知識を借りる事になった。結局、キリスト教は一人の禁欲的な精神主義者が創造した教養的文芸作品である。新訳聖書の内部からその浪漫的要素を削除けば、トルストイの晩年の作品にその類似的箇所を見出だす事になる。

13 キリストの言葉

キリストは自己を業績に照らして客観的に認識するため弟子達に「わたしは誰か？」と聞いたが、その答えは簡単である。彼は福音書の中の無数の比喩の作者であると同時に新訳聖書という伝記作品の主人公である。キリストは彼の生涯唯一の作品福音書から独立して自分の人生を生きたれなかった作家の一人である。我々は多くの浪漫的作家の人生に、

作品に引摺られて実人生を十分に生きられない側面を見出だすだろう。

14 孤身

名声の高まりと共にイエスは孤独を求めたが許される事ではなかった。こうした人生の一齣を福音書の作者は書落としていない。天国という虚構の世界あるいは奇跡は必然的にキリストの周囲に人々を集まらせた。彼が危険を承知でエルサレムに行ったのも、ペテロがイエスを救世主と呼んだ結果、旧約の世界の予言者の行動を取らざるを得なくなったとも考えられる。神から与えられた使命より自然の中での休息を愛したはずの彼が、弟子達の期待に沿って、天国への道を推進し、奇跡を行ったのは性格の弱さに起因する、あるいは彼の矛盾した側面であるかもしれない。とにかく名声の高まりと共にイエスが孤独を求めたのは歴史的事実である。トルストイは死の床で自己の名声への不信感をつぶやいた。名声の高まりと共に孤独を求める境地は誰にでもあるもので、ゲートルはこの心境を作品ファウスト第二部第一幕でファウスト自身に語らせている。が、ゲートルが幸福なのは心安らぐ自然の中でファウストにこの吐息をつかせていることである。

15 クリストの歎声

キリストは彼の浪漫的精神の産物であるキリスト教、天国への道を説明するためしばしば比喻をもってしたが、凡庸な弟子達にはキリストの飛翔する精神の片鱗を掴む事も難しかった。彼の鋭い透徹した人間理解と放浪生活によって養われた眼識から見れば弟子の無理解は想像を越えたものであったろう。キリストの詩的勝利の結果、キリスト教は地上の権力と一体になり、彼のはかない浪漫主義は巨大な寺院によって守られることになった。簡単な比喻さえ理解出来ない弟子達にむかって発せら

れた言葉「どうしてお前たちはわからないか？」この詰問の言葉は、キリスト教が盛況になった今日なお浪漫的精神に無縁な全ての人々に向かって発せられている。

16 サドカイの徒やパリサイの徒

生前のイエスがその実利一辺倒の組織であることから嫌ったサドカイの徒やパリサイの徒は、その組織に夢想的要素が無いことで、キリストの詩的精神よりはるかに実社会むきである。こうした存在が徴のようにあるいは苔のように地上に生き続け聖霊の子供達を滅ぼしていく事を指摘したのは「進化論」で「適者生存」を唱えたダーウインである。この地上を清々しく生きるために彼等の処世術ほど素晴らしいものはない。マリアはキリストの精神にそうした才知の無いことを母として嘆いた事であろう。ペトホオヴェンがゲートルに向かって発した怒りは聖霊の子であるゲートルの精神の内部にサドカイの徒やパリサイの徒と同じ処世の才を見出だしたからに他ならない。

17 カヤパ

キリストに理解を示しながら事実上磔刑の命令者となったローマ総督ピラトに対してと同じように、聖霊の子供でありながらイエスを有利に導くことの無かった大祭司カヤパに対しても後代の憎しみが集中している。確かにイエスを審問したカヤパは自分と同じ精神構造を持っている。故にイエスを憎んだかもしれない。しかしそれは大衆の理解を超えた浪漫的精神の持主であるイエスを憎んだ大勢の人々の気持ちを代弁したにすぎない。大祭司カヤパは礼服を身につけ松明の光の中で冷酷にキリストを見下して居たことだろう。キリストの詩的勝利の後、大衆は自分達の気持ちを代弁したローマ総督ピラトと大祭司カヤパをキリストの浪漫主義が理解できなかったという理由で嘲笑している。

18 二人の盗人たち

キリストの精神主義がいかに理解されなかったかは、彼が政治犯としての名督を与えられる事無くたんなる犯罪者と共に処刑されたことで明らかであろう。十字架上でキリストを罵倒した盗人の言葉は、キリストの最後の姿に実人生に失敗した自分の姿を見たことを意味している。しかし一方人生の終わりに於いて天国への道を夢想したもう一人の盗人はキリストに忘れかけていた自分の精神主義を思出させた。

「お前はお前の信仰の為に必ず天国にはいるであろう。」
十字架上での苦痛の中でキリストのこの言葉は、彼に救世主としての立場を確証させ辛うじて威厳を保たせることになった。

後にキリストの詩的正義が地上の権力と一体に成ったとき、人々の同情がキリストの同伴者となったこの盗人に集中した。と同時に軽蔑が他の盗人に集中することになった。キリストの精神主義の地上に於ける勝利の結果である。しかし、この人生を快適に生き続け天国に望みを賭ける

必要のない処世術にたけたサドカイの徒やパリサイの徒の子孫たちは、キリストを罵倒した盗人の行為に賛成している。死後の天国を期待することなど彼等にとって無花果や真桑瓜をすすする程度の喜びも与えてくれないのである。

19 兵卒たち

ゴルゴダの丘までキリストを引立てていったローマの兵卒たちは、十字架の下でキリストの衣服を奪いあった。人生に精神の価値を求めない彼等模範的兵士にとってキリストの理想主義は視界に入ることなく、彼の存在は古着の元の所有者にすぎない。人間の欲望と無知に対して限り無い理解を持っていたキリストにとってこれらローマの兵卒たちの行為は何等驚くべき事では無かった。十字架上のキリストは即物的に彼等の行為を是認しただけであった。

20 受難

キリストは天国という虚構の思想を実践的思惟にまで高揚させるため、つまり思想を観念的思惟に終わらせないためには自分の十字架上の死が必要だと考えた。彼は最初プライドによって自己を支えていたが、迫り来る肉体的苦痛とともに天国の門が開かれることなく自己の思想が虚妄の思惟に終わるのではないかという不安に襲われた。彼に精神主義を捨てさせ、実人生での充実した日々を送ることを願った母のマリアの姿を十字架の下に認めた時は辛かったわけである。彼は「わが神、わが神、どうしてわたしをお捨てなさる」という詩編の一部を唱和して、虚構の思想に人生を賭けた自己の精神を励ました。我々は彼の最後の声に詩的正義の実現に賭けた一人の男の決意の激しさを讀取ることが出来る。

マタイ伝の記す所によれば、キリストの死の直後奇跡が行われて彼が

眞の救世主であったことが側面から証明されているが、これは彼を救世主として支持してきた全ての人々に大きな衝撃を与えたことを意味している。取乱したマリヤの記述が無いのは福音書の威厳を保つために取られた処置である。キリストの何気ない発言の一つ一つに神学的根拠を与えているパピニの「キリスト伝」も救世主の死の直後の奇跡を紹介するのみで、嘆きのマリヤの姿を記述していない。キリストの栄光を完成させるため自ら信じていない事を権威付けることでキリストの一生を飾立てたパピニの「キリスト伝」の欠陥はこうしたことに伺がえるのである。

十字架のキリストの死は彼を救世主とし彼に旧約のエリアの奇跡を期待した全ての人々を落胆させるにたる平凡なものであった。その平凡さ故に、救世主に賭けた夢が全て裏切られるという意味でエリアの奇跡を現実に見るより恐ろしいものであった。人々にとって今まで抱いてきた全ての夢想が全て無に帰した、その衝撃の大きさが象徴的に記されているのである。しかし人生に夢を持つことの無い処世に長けた老祭司たちは、自分達と志を同じくするこの天才的若者の悲劇に動揺することは無かった。

「人生は微のように、あるいは苔のようにいきるべきなのだ」

老祭司の即物的な勝利の言葉は、パレスチナのキリストの悲劇の地を飛超えて彼の詩的精神を踏倒して全世界の俗物達に伝わっている。

21 文化的なキリスト

自分で見た現実的な物にしか信を置かない素朴な弟子達は、キリストの洗練された繊細な精神の構造を把握する事は出来なかった。師の能力が弟子達を凌駕していた事以外ではこのことがキリストが彼等に理解されなかった最大の理由である。大衆はキリストに何時も奇跡だけを求め

ていた。それはパレスチナ民衆の民度の低さに関係がある。哲学が盛んで観念的理論の理解が民衆に行渡っていた摩伽陀国の釈迦は奇跡によって民衆の心を擱む必要が無かった。福音書に残されたキリストの言動は、その洗練の度合いにおいて都ローマの詩人に劣るものでなかった。彼は故郷のガリラヤを離れて他国の地中海沿岸地方のある異邦人の女（カナンの女）の願いを聞入れたりした事もある。（マタイ伝7章25節以下）

キリストの先導者バプテスマのヨハネはその私生活において野蠻人の匂いをさせている。キリストは弟子達に洗礼を与えるのにかつてヨハネが彼にそうしたようにヨルダン川の水につけるといふような事をせず、洗礼に因ってそれをなした。また彼が洗礼を与えた相手は全て社会の下層階級の人々であった。こうした側面に彼の洗練された姿と愛の形を見ることが出来る。奇跡を与える時も相手に過大な心理的負担を与えないよう細かい配慮をした（お前の信仰はお前を癒した。マタイ伝9-122）

対人関係でこうした細かい心配りを示した洗練されたキリストは、野蠻な十字架の上で息たえるという荒々しい最後を迎え、野生の人生を生抜いたバプテスマのヨハネは宮殿のサロンで命を失った。二つの異なる人格が迎えた最後にはそれぞれに運命の皮肉が感じられる。

22 貧しい人たち

キリストが創造した天国という夢想は社会の下層の人々を慰めたが、そこには彼等が人生を諦めてくれる事が利益と身の安全になった貴族たちの側面からの援助もあったであろう。キリストの才知は大衆は無論のこと貴族の心をも擱んだのである。彼の天国の夢は現代に生きる我々の心にも訴える何かがある。精神の救済を求めて信徒に成ろうとするにも困難が伴う、また天国の門に入ったからといって即幸福とは思われない。しかし、キリストが創造した天国という観念は何かしら夢を与えてくれ

る。彼キリストは旧約の世界を下地にして登場した才能ある作家であり、人類の歴史が生んだ偉大な創作家である。予言者とはキリストの代名詞になっている。彼の一生の細部の一つ一つが人生を生きる我々の心を描いている。

死の直前の彼は自分の掲げた天国という夢想を実践的理念とするために精神主義を押し立てて実人生の犠牲を惜しまなかった。こうした一途な生き方を、芸術と人生の調和を求めたゲーテはその青臭さ故に軽蔑した。丁度浪漫派の詩人のゲーテの実人生の充実しすぎている事に多少の不満を述べている様に。我々は精神の危機にあつては、同伴者キリストを求めないではいられないのである。

注

1 「ヨハネはクリストの伝記作者中、最も彼自身に媚びているものである」「マタイ」「マルコ」「ルカ」の三福音書は、細かい点まで一致するものが多く、これを一群のものとして扱い、共観福音書というのに対し、「ヨハネ」のみは相違する点が多い。

(1) カナの饗宴、ラザロの復活などは「ヨハネ伝」のみにある。

(2) 事件の記述だけでなく、イエスの言葉は対話となつて、長文の解説記事となつている。

(3) イエスの言葉はイエスの自己啓示にもちいられている。

(4) ユダヤ人は不信仰者の立場にたたされ、反ユダヤ的論議に貫かれている。

2 「日本近代文学大系「芥川龍之介」、以下「大系」と省略 四三九ページ）
「野蛮な美しさにかがやいたマタイやマコに比べればーいや、巧みにクリストの一生を話してくれるルカに比べてさえ、近代に生れた我々には人工の甘露味を味わさずには措かない」

「マタイ伝」は「マルコ伝」以外の主の言葉を集録した文書を利用し、また

「マルコ伝」において「一つであった重心を四つに増加している」（和辻哲郎）

「マルコ伝」は最古の福音書であり、最も単純な原始的統一をもっている。「ルカ伝」は「マタイ伝」とは別の材料によって詳しく描かれ、「マルコ伝」の原始的統一を破っている。（大系、四三九―四四〇ページ 頭注）

3 「二つの衣服を持てる者は持たぬ者に分け与えよ」ー彼は答えて言った、「下着を二枚もっている者は、持たぬ者に分けてやりなさい。食物を持っている者も同様にしなさい。」（ルカ3―11）

4 「無政府主義」ーいっさいの権威や強制を否定し、絶対的な個人の自由を社会の基本とする主義。ルナンはイエスを民衆政治について何も考えていないという理由で、無政府主義者だといっている。（大系四四一―四四二ページ 頭注）

5 「彼の同志さえ信用しなかった」ー

A イエスは言われた「よくあなたに言っておく。今夜鶏が鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言うだろう」（マタイ26―34）

B そして、一同が食事をしてるとき言われた「特にあなたがたに言っておくが、あなたがたのうちの一ひとりが、わたしを裏切るうとしていいる。」（マタイ26―21）

6 「トルストイの他人の真実を疑ったように」ー「トルストイは…人間の誠意というような事をもうとう信じなかった。優しい感情というようなものは、彼にとっては全く虚偽であった」（ピュルコフ「トルストイ伝」大系四四一―四四二ページ）

7 「明日のことを考えるな」ーだから、あすのことを思いわずらうな。あすのことは、あす自身が思いわずらうであろう。一日の苦勞は、その日一日だけで十分である。（マタイ6―34）

8 「ヨブ記」ー著者不明。「旧約聖書」中の一書。ヨブ（イサッカルの二氏族の長）の繁栄から始まり、財産を失い、家庭を破壊され、健康を失ったヨブ

- 9 「最高の市価」―「西方の人」27、(マタイ21-5)、「シオンの娘に告げよ、見よあなたの王がおいでになる、柔和なおかたで、ろばに乗って、くびきを負うろばの子に乗って」キリストが独自の人生を生きたらず、旧約の世界の束縛を受けているということ。
- 10 「其子イエルサレムに留りぬ。然るにヨセフと母これを知らず、三日の後殿にて遇ふ彼教師の中に坐し、聴きかつ問ひたり。聞者皆その知恵とその應對とを奇しとせり」さんざんお前を探してゐた」
「どうしてわたしを尋ねるのです。わたしはわたしのお父さんのことを務めなければなりません」
「されど両親は其語れる事を曉らず」
「其母これらの凡の事を心に藏めぬ」(ルカ2-41:51)
- 11 「人の皆無、仕事は全部」―「芸術家はその作品の中で、神が自然における以上に現れてはならぬと思つています。人間とは何者でもない。作品がすべてなのです。」(フローベールのジョルジュ・サンド宛書簡 一八七五年十二月 大系四四三ページ)
- 12 「一人の外に善者はなし、即ち神なり」―イエスは言われた「なぜわたしをよき者と言うのか。神ひとりのほかによい者はいない」(マルコ10-18)
(マタイ19-16:17)
- 13 「世の罪を負う神の子羊を觀よ。我に後れ来らん者は我よりも優れる者なり」
―(ヨハネ伝1-29、30)
- 14 彼の弟子達の足を洗ってやった夕食の席から立上がつて、上着を脱ぎ、手拭をとって腰に巻き、それから水をたらいに入れて、弟子たちの足を洗い、腰に巻いた手拭でふき始められた。(ヨハネ12-4、5)
- 15 「ソロモンよりも大いなるもの」―彼女はソロモンの知恵を聞くために地の果から、はるばるきたからである。しかし見よ、ソロモンにまさる者がここにいる。(マタイ12-42後半)
- 16 「お前たちはもう綺麗になった」―あなたがたは、わたしが語った言葉によって既にきよくされている。(ヨハネ15-3)
- 17 「予言者X・Y・Zの言葉に応わせん為なり」―(マルコ7-6、7)
- 18 「わたしは誰か?」―シモン・ペテロが答えて言った、「あなたこそ、生ける神の子キリストです。」(マタイ16-16)
- 19 「譬喩」―イエスはことに譬喩にすぐれていた。ユダヤ教の何かが、彼にこのうまい様式の模範を示したわけではけつてない。この様式は彼の創作である。(ルナン「イエス伝」10章 大系四四六ページ)
- 20 「イエス：家に入りて人に知られざらん事を願ひしが隠れ得ざりき」―さて、イエスは、そこを立去つて、ツロの地方に行かれた。そして、だれにも知れないように、家の中にはいられたが、隠れていることができなかつた。(マルコ7-24)
- 21 「世界中に苦しんでゐる人々は沢山ある。それをなぜわたしばかり大騒ぎをするのか」―「地上には幾百万の人々が苦しんでいる。どうしてあなたがたは、私一人の事を構うのか?」(ロマン・ローラン「トルストイの生涯」)
- 22 「このトルストイの言葉は、ピリユコーフ伝の第4巻第11章に見られる一文で日本には訳されていない部分であり、これによつても(芥川がピリユコーフ伝を)英訳で読んだものと推定される。」(柳富子「芥川におけるトルストイ」注16)
- 23 「ファウストの第2部の第1幕は実にこの吐息の作つたものと言つても善い。が、ファウストは幸いにも 花の咲いた山の上に佇んでいた。」―第2部第1幕は「ファウスト、花の多い草野に身をよこたえている。疲れきつており、不安にかられていて眠りを求めている様子。」のト書きではじまる。
「どうしてお前たちはわからないか?」―目があつても見えないのか。耳が

あつても聞てえないのか。また思出さないのか。(マルコ 8-18)

- 24 「サドカイの徒やパリサイの徒」—そこでイエスは言われた「パリサイ人とサドカイ人とのパン種を、よくよく警戒せよ」(マタイ 16-6)

「そのとき彼等は、イエスが警戒せよと言われたのは、パン種のことではなく、パリサイ人とサドカイ人との教えのことであると悟った。」(マタイ 16-12)

- 25 「盗人たちの一人はクリストを罵ることを憚らなかつた。」—(ルカ 23-39)

「しかしもう一人の盗人は彼よりも更に妄想を持っていた」—(ルカ 23-42)

- 26 「お前はお前の信仰の為に必ず天国にはいるであろう」—(ルカ 23-43)

「兵卒たちは十字架の下にクリストの衣を分かち合った」—(ヨハネ 19-23)

- 27 「殊に十字架を見守っていたマリヤを眺めることは苦しかった訳である」—

(ヨハネ 19-26)

- 28 「エリ、エリ、ラマサバクタニ」—(マタイ 27-46)、(詩篇 22-1)

- 29 「彼の息の絶える前には何か大声を発していた」—(マタイ 27-50)

- 30 「殿の慢上より下まで裂けて二つになり、又地震いて岩裂け、墓ひらけて既に寐ねたる聖徒の身多く甦」—(マタイ 27-51、52)

- 31 「クリストの一言一行に永遠の注釈を与えているバビニさえこの事実はマタイを引いているのに過ぎない。彼自身を欺いているバビニの詩的情熱はそこにもまた馬脚を露している」—一例「父よ、わたしの霊をみ手にゆだねます」(ルカ 23-46)をパラフレーズして「私はあなたを呼びました。悩みの淵の中にいる私には、あなたが私をお捨てになつたように思われたからです。」

(大系 四五〇ページ 頭注 3)

- 32 「彼の愛国的精神さえ抛つて頼みない文化人だった。」—(マルコ 7-24…

30)

- 33 「彼は又彼の行った奇跡の中に度々細かい神経を示している。」—「娘よ、しっかりとしなさい。あなたの信仰があなたを救つたのです。」(マタイ 9-23)

- 34 「クリストのジャアナリズムは貧しい人達や奴隷を慰めることになつた。」

—(マタイ 6-25-34、マタイ 19-16-30、ルカ 6-20、ルカ 12-22-40)

- 35 「何度叩いても開かれない門のあることは我々もまた知らないわけではない」

—求めよ、そうすれば、与えられるであろう。捜せ、そうすれば、見出だすであろう。門をたたけ、そうすれば、あけてもらえるであろう。(マタイ 7-7)

- 36 「狭い門から入ることもやはり我々には必ずしも幸福ではないことを示している。」—(マタイ 7-13、14)

- 37 「我々はエマオの旅びとたちのように我々の心を燃上がらせるクリストを求めずにはいられないであろう。」—(ルカ 24-13-32)

付記

最初に「統西方の人」の全文の通釈を行い、次に注の形で作品の素材となつた聖書の該当箇所を呈示した。注については次回、芥川龍之介「西方の人」注釈の折補訂したい。